参加者による記録

2019年１月１９日(土)

18：00～　事前学習会・結団式

出国に先立ち羽田空港国際線に直結したロイヤルパークホテルザ羽田で事前学習会と団結懇親会を行った。

事前学習会では冒頭吉井会長から、参加者及び派遣組織へのお礼とともに、このＷＳＴの主旨・目的等についての挨拶を受けた。次に参加者は自己紹介と参加する上での各自の想い等を披露した。

その後、鈴木事務局長がアジア連帯委員会の歴史・活動概要、ラオス、タイの訪問先について説明し、旅行会の蛯谷さんから旅の注意事項等の説明があった。また、訪問先での役割分担と団長、副団長を決め、訪問先へのお土産を確認した。事前学習会の後、場所を移して団結懇親会を行った。最初は緊張気味だったメンバーも懇親会では、和気あいあいと交流し合った。

事前学習会

出発

2019年1月20日(日)

NH849便　00：10 羽田発 → 05：15　タイ･バンコク着

早朝、バンコクのスワナプーム国際空港に到着。イミグレーションで入国手続き、荷物を取って、２階の出発ロビーのバンコクエアーのカウンターにチェックイン、荷物検査、イミグレーションで出国手続きをして乗り換えた。空港内のレストランで１時間ほど打合せを行い、PG943便でビエンチャンに向け出発。

PG943便　09：45　バンコク発　→
11：00　ビエンチャン着

ビエンチャン・ワッタイ国際空港では通訳・コーディネーターのフンペンさんと合流し、専用車で移動し、ホテルにチェックインした。

その後、市内のラオス麺レストランで昼食をとった。

ビエンチャンに到着

さらに、タートルアン寺院、凱旋門を視察。夜はメコン河沿いホテル３階のレストランで本場のラオス料理を堪能した。レストランには高校生寮卒寮生代表のヌーソン君も合流し、参加者と日本語で交流した。

2019年1月21日（月）

11：00～　ソムバット村小学校（４番目校）

報告：本岡　諒一

午前８時前に宿泊していたホテル「メルキュールビエンチャン」を出発し、ＣＳＡ４番目校であるソムバット村小学校に向かった。市街地を抜けると道は舗装されている箇所とされていない箇所とがあり、車内は非常に強い揺れを感じながら約２時間走行し現地に到着した。

ソムサバット村小学校 教室

車を降り校長室へ案内された。校長先生から冒頭、感謝のお言葉と現状の報告説明を受けた。全校生徒数は336名（男子158名・女子178名）で、教室は全部で12部屋ある。現在教員は13名で対応しているとのことだった。その後、ＣＳＡを代表して堀田副団長から挨拶をおこない、鈴木事務局長の方から今回訪問した趣旨説明をおこなった。

今回の訪問の目的と活動内容は以下の３点である。

①2015年に教室建家の屋根を修理したので、現状確認をおこなうこと。

②日本から持って来たお土産と文房具を渡すこと。

③教室に入り、日本から作って来た新聞紙の兜を被らせて遊んだり、折り紙を使って紙飛行機の作り方を教え、外に出て一緒に飛ばして交流すること。

学校側から小さめのとても甘い蜜柑と、見た目が落花生のようなラオスの果物であるタマリンバをいただきながら、合計５つの質疑応答と意見交換会をおこなった。

【質疑応答】

Ｑ．生徒が今一番興味を持っていることは？

Ａ．勉強以外ではスポーツ（中でもサッカー）、絵を描くことやラオス民族の踊りも好きだ。

Ｑ．生徒数は５年前258名だったのが、現在336名と増加しているが、今後も増えていくのか？

Ａ．これからも増える見込。教室も10部屋から12部屋へ増設した。

ソムサバット村小学校の校舎

Ｑ．この辺りの学生は卒業後どのような就職先に就くのか？

Ａ．専門学校や大学へ進学する生徒もいる。あとは、地元の農家を継いだり、軍隊や警察

官になる生徒もいる。

Ｑ．今、特に困っていることは？
Ａ．教科書のレベルが高くなってきていて、それを教える方法に苦労している。中でも算数が難しい。

Ｑ．教えるにあたって必要なものはあるか？
Ａ．黒板に数字を書くだけではなかなか理解しないので、実物等を作成し工夫をしている。

その他、いただいた甘い蜜柑は一年中収穫が可能なことや、一番小学校から遠い生徒で片道12ｋｍ離れていて、毎日トラックで送迎されていることなどを聞き校長室をあとにした。
次に、2015年に修理をした屋根を確認した。綺麗に修繕がされ問題ないことを確認した。その後、日本から持参した手土産と生徒に文房具を渡した。
最後に、メンバーが、５つのクラスに分かれ生徒達と交流を深めた。１クラス20名程度で学年別に教室が分かれている。まず始めに、メンバーが慣れないラオス語で挨拶をし、自己紹介をした。そして、生徒に新聞紙で作った兜を頭に被らせてあげた。皆とても嬉しそうな笑顔をしていた。その後、一人一人に折り紙を一枚ずつ配布して、紙飛行機の折り方を教えた。メンバーは一番前の黒板を台替わりに使い、ゆっくりと手順を日本語で説明しながら手本を見せた。手先が器用な生徒もいれば不器用な生徒もいて、メンバーが補助をしながら紙飛行機を折り進めた。完成後、生徒全員で教室を抜け出し運動場に出た。最初メンバーが飛ばし、その後生徒たちも青空に向けて一斉に投げた。飛んでいく紙飛行機を走って追いかけている生徒もいた。非常に楽しい有意義な時間を過ごし、最後に生徒と先生とメンバー全員で、「１（ヌーン）２（ソン）３（サーン）」「イェーーーイ」と掛け声を出して集合記念写真を撮った。短い滞在時間ではあったが、最後は別れを惜しみながら学校を後にした。

14：30～ トンナミ村小学校（第6番目校）

報告：堀田　真吾

ソムサバット村小学校を出発した後、昼食を挟み、首都ビエンチャンより約220km離れたトンナミ村小学校に到着した。ここでは、昨年補修を行った校舎の天井補修状況の確認と、お土産として持参した綱引きを生徒と行う予定をしている。
到着すると、先生や生徒、関係者ら約200名の出迎えがあり、抱えきれないくらいの花束の贈呈など熱烈な歓迎を受け、改めてＣＳＡの活動が感謝されているということを認識した。

補修されたトンナミ村小学校の校舎

その後、校長・教育省副局長・村長から歓迎の辞を受けた後、ＣＳＡを代表して工藤さんが挨拶し、意見交換を行った。

【校長の話】

トンナミ村は敷地面積が約52ヘクタールあり、人口10,368名（女性5,197名）が生活しているが、年々人口が増加している。
民族構成は、山岳民族であるモン族が8,687名と一番多く、次いでラオ族が1,406名、中

トンナミ村小生徒の歓迎列に大感激

ラオ族が275名の順になっている。人口の約71％が農業に従事しており、家族の人数構成は７～８名/家族。

生徒数は1,022名（女性515名）、１～５年生まで各５クラスとなっている。村人の増加にともない、設立時（1998年）の生徒数315名から大幅に増加しているが、村内の子供たち全員が入学できている。

意見交換の際、いくつかの問題点について説明があったが、大きな問題はやはり「水」とのことであった。ラオスはモンスーン気候であり、乾季の際にはほとんど雨が降らないため２年前に掘った井戸も枯れてしまい、生徒たちが手を洗う水やトイレに流す水など、生活に使用する水が不足しているとのことであった。そのため、雨水を貯めるタンクが欲しいとのことであった。また、新たな井戸を掘るためには2,000ドルが必要であるため、日本からの支援をお願いしたいとのことであったが、将来的に水の問題が解決すれば、学校を囲む壁の設置や木陰をつくる木の植樹、図書館の設置など生徒たちが勉強しやすい環境をつくりたいとのことであった。

校舎は、①屋根の補修が一部残っている、②屋外トイレ建屋の壁・屋根の補修が必要であることが確認できた。

視察後は生徒たちと綱引きを行う予定であったが、試験期間中ということもあり贈呈式終了後に帰宅したため、生徒たちとの交流することはできなかったが、校長先生をはじめとした関係者一同による歓迎の食事会が開催され、日本では味わうことのできないラオス料理をいただきながら、片言のラオス語と身振り手振りで交流を行い、ラオス人のやさしさと暖かさを感じることができた。最後にトンナミ村で採れたバナナなどのお土産をいただき、別れを惜しみながら小学校を後にした。

トンナミ村小学校前で

2019年1月22日（火）

９：００～　ラオス教育スポーツ省総合教育局

報告：山﨑　誠也

首都ビエンチャンにある教育スポーツ省総合教育局で、シソウク局長よりラオスの教育事情について説明を受けた後、質問し、応えていただいた。

【質疑応答】

Ｑ　昨日、学校を訪問したときに先生が「教え方が難しい」と言っていたが、何か工夫はあるか？

Ａ　最近は日本と同じように教科書を使い、数学などの教え方が変わった。また来年も数学の教科書が変わる予定がある。

教育省で意見交換

Ｑ　日本と同じような教育をしてくれるのは日本人として嬉しいですが、難しくないですか？
Ａ　先生がもっと勉強して頑張らないといけない。新しい教科書はいつでも難しいと思う。

Ｑ　学校で水がなくてトイレが困っていると聞いたが？
Ａ　国も水、トイレ、井戸が無いことは厳しいので、政府に予算をお願いしている。

Ｑ　学校は給食？弁当？
Ａ　弁当。みんな肉、魚ともち米を持ってきている。

Ｑ　先生が田舎に行きたがらないらしいが？
Ａ　ビエンチャンで勉強して先生になった人が多いから、また田舎に戻りたくない。ビエンチャンで結婚して生活したいとみんな考えている。水道が無いとか田舎では生活しづらい。トンナミ村小学校は生徒の人数が多くなってきたので、政府の規制が入るかも知れない。

Ｑ　教育省として特に力を入れたいことは何か？
Ａ　先生の教育を発展させないといけないので、よくなるように頑張りたい。世界と同じようになりたい。先生自身がいろいろ考えて出来るようになって欲しい。

10：30～　在ラオス日本大使館

報告：工藤　健弘

在ラオス日本大使館で

ビエンチャン市内にある在ラオス大使館を訪問し、安里二等書記官から近年のラオスの状況について説明いただくとともに、意見交換を行った。

冒頭、鈴木事務局長からラオス支援に関するＣＳＡの取り組み（小学校建設・補修、高校生寮支援、救援衣類送付）について説明を行った後に、安里二等書記官から資料を基に次のとおり説明を受けた。

ラオスは多民族で構成される国家であるが、2018年に新たに１民族が認められ、現在は50の民族で構成されている。また、人口構成は若年層が多い構成であり、近年の母子保健拡充の効果もあって５～９歳の年齢層の死亡率に改善傾向が見られる。外交関係は基本的には全方位外交であるものの国境を接するベトナム、タイおよび中国と強い結びつきが構築されている。また、日本とラオスの二国間関係としては、日本は対ラオスＯＤＡトップドナーであり、「経済・社会インフラ整備」、「農業の発展と森林の保全」、「教育環境の整備と人材育成」、「保健医療サービスの改善」を重点分野として開発

支援が行われているという状況だった。
　説明後に行われた意見交換では、ラオス国内における中国の投資傾向、それを踏まえたこれからの日本の対ラオス支援の在り方や教育に関する支援などが話題に上がった。
　ラオスとしては、この数年で後発途上国からの卒業を目標としているとのことだったが、若年層が多い人口構成など未来への希望も感じられる国でもあり、今後も日本およびＣＳＡには、ラオスの実情や将来像に見合った支援や活動を継続して欲しいと思った。

12：00～　ラオス保健省

報告：森　啓記

クアラオの前で

　ラオス政府の衣類担当省庁であるラオス保健省との懇談をラオス料理の老舗レストラン「Kualao Restaurant」で行った。
　ラオス保健省ナオブッタ長官から「ＣＳＡが毎年継続して送ってくれる救援衣類は、大変ありがたく、ラオスを代表して心からお礼を申し上げる。ラオスの恵まれない人々や被災者のために大変役立っているので、大変喜んでいる。一昨年は台風被害、昨年はダムの決壊等あり、衣類は大変助かった。皆さんの支援を必要としている人たちは未だたくさんおり、大規模災害時にはラオス赤十字社が衣類を被災者にすぐに届けられるように、連携している。今後もラオス保健省とラオス赤十字社は一緒に被災者対策を行っていく。日本のご協力頂いている方々に、くれぐれもよろしく伝えてほしい。」との挨拶を受けた。
　鈴木事務局は、衣類の輸送・保管におけるタイ・ラオス国内の各省庁の連携について質問し、ＣＳＡからの衣類がより迅速に適切に届けられるよう、より一層の協力をお願いした。
　懇談には、ナオブッタ官房長官はじめラオス保健省の多くの幹部職員が同席し、食事を共にしながら、ラオスの現地事情や参加組織の日本国内での救援衣料の集約方法など幅広く意見交換を行い、お互いの情報を共有することできた。
　このレストランは、世界各国の署名人や日本の歴代総理大臣も訪れており、現地の人も一度は訪れたい憧れの場所であり、様々な種類の伝統的ラオス料理を堪能することができた。

14：00～　ラオス保健省衣類倉庫

報告：山本 雅士

　ラオス保健省の衣類倉庫を訪問し、中古衣料の確認、引き渡し式、今回の問題に対しての解決策などの意見交換を行った。
　ラオス保健省副長官のソムチット氏と倉庫管理人のスリサンソンリライ氏に対応して頂いた。そこで、副長官は日本からの衣料や物資は宝もので楽しみにしている人がいると大変感謝されていた。
　日本から届いた衣料は①ラオス赤十字、②文部

ラオス保健省衣類倉庫で

省、③村(学校・病院)へ配布するとのこと。内訳については、倉庫管理人から報告を受け、1/9に日本から4333ケースを発送し、そのすべてにあたる4333ケースが到着した。破れたケースも中にはあったが、問題ないとのことで安心した。

保健省からの許可がないと村へ運べないので、許可が下り次第北の火災で被災された方へ500ケース送付予定とのこと。日本からはきちんと整理・仕分けして送ってくれるので助かっていると感謝されていた。

鈴木事務局長から、「ラオス向衣類がタイの港に長期滞留していることにより約500万円(学校建設費用分程度)の保管料が掛かってしまったこと」について質問した。副長官の説明は以下の通り。

例年は保健省が財務省への連絡でスムーズに衣類の移動ができていたが、①輸入強化(経緯が明確にならないと輸入できない)、②2018/12末に税金の仕組み変更した事、③外務省・財務省も内容を把握していないと受け入れできない事、④運送会社の担当者の変更の４項目が重なり輸送の仕組みが複雑になっていた。

今後の対策としては、①保健省・財務省・外務省へ公的文書を事前に送り、衣類の流れをはっきりさせる。

さらに鈴木事務局長は「今後も支援を続けるために輸送費を下げたいので、ラオス政府側からバンコクまで回収に来ることはできないのか？」と質問した。

上記については、２月事務局長が来る時に、中古衣料についての取り決め事項を文章として作成・確認し、無駄な資金を使わず最大限の支援を行える体制をつくっていきたいと。

大きな問題があった事と自分の組織から送った箱は発見できなかった事で少しショックだったが、他の参加されている労働組合からの箱があり安心できた。この物資がタイムリーに届けられることを期待したい。この事実をもちかえり、今後の活動へ積極参加をしてもらえる体制を整えていきたいと思った。

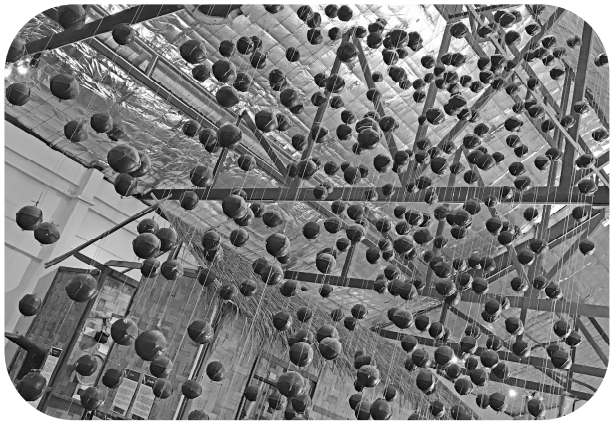
衣類輸送　例年：東京10月発送→11月到着
今回：東京10月発送→11月タイ到着(滞留)→１月到着

15：00～　ラオス地雷博物館

報告：本岡　諒一

ビエンチャン市内にある「ラオス地雷博物館」へ行き見学した。

第二次世界大戦後ベトナム戦争が発生し、1954年のジュネーブ協定によってベトナムが南北に分断された。当時、北ベトナムが南へ移動するための空路としてラオスと言う国が使われていた。その移動ルートを中心にアメリカ軍が約300万トンもの爆弾を投下し、今尚ラオスには国土の約３割の不発弾が眠っている。



ラオス地雷博物館

館内には多くの外国人観光客が訪れていた。入ってすぐのところに、ラオスの地図が大きく飾ってあった。全体地図の右下の方に赤色で投下された箇所が示されていた。また、地図のすぐ傍にはモニターがあり、不発弾による被害などの紹介映像が流されていた。不発弾の大きさは拳一つ分程度であるが、その威力は絶大であり、畑を耕す際に鍬が当たって爆発するなど日常生活においても、様々な形で爆発が起き被害に遭っている。

年間400人ほどの犠牲者が出ていて、その内約４割は子どもが犠牲になっている紹介もあった。腕や脚が犠牲になることから、博物館の周辺には車椅子製造工場や、義手・義足を製造している工場が隣接していた。不発弾は年々発見され減少しているようだが、全て撤去するにはあと100年以上はかかると言われている。

今の日本では考えられないが、今回改めて戦争の過酷さを再認識し、今尚危険区域付近で生活を送っているラオスの貧困問題を知ることができた。

18：30～　高校生寮卒寮生との交流

報告：伊津田　秀美

卒寮生と

サンティパープ高校生寮の卒寮生との交流会が佐古レストランで開催された。

お互いに交流が取れるようメンバーが２～３人おきに着席し、間に卒寮生に着席した。

高校生寮の１期生であるヌーソンさんが全体の進行を進める形で交流会がスタート。まずは鈴木事務局長が挨拶し、その後メンバーを代表して工藤さんが挨拶をした。ビアラオで乾杯し、食事はラープやフライドライス、トンカツ、ガイドのフンペンさんが考案した巻き寿司などをおいしく頂いた。

食事をしながら卒寮生とカタコトの英語や、Google翻訳アプリを駆使して各々交流した。１時間ほど食事をしてからヌーソンさんの通訳で、ＣＳＡメンバーと卒寮生が一人ずつ自己紹介をした。卒寮生は外務省勤務や、教師、医師を目指して大学に通っている方など、とても優秀な方ばかりだった。

20時頃からじゃんけんゲームをし、優勝者には扇子をプレゼント。その後も数回じゃんけんゲームをし、全員に手帳や卓上カレンダーなどのプレゼントを渡した。手帳をもらった卒寮生は、昨年も手帳をもらったと、使い込んだ手帳を見せてくれた。

卒寮生と

個人的には卒寮生へのプレゼントを用意していなかったので、組合事務所で余っているボールペンや手帳などの事務用品を持ってくればよかったと思った。

最後に全員で集合写真を撮った。その後は卒寮生同士も久々の再会だったようで各々写真撮影をしていた。

実際にＣＳＡが寄贈した高校生寮に通って、その後色んな道へ進んでいる卒寮生たちと実際に会って話をすることで、彼らにとって高校生寮の存在がいかに大きかったかを実感することが出来た。

2019年1月23日（水）

10：00～　タイ衣類引き渡し式

報告：山﨑　誠也

タイ衣類引渡し式

この日の朝にラオスからタイへ陸地続きで入国。車線が右側通行から日本と同じ、左側通行に変わったのを新鮮に感じた。ウドンタニ・貧困者保護センターに到着し、式が始まる前に労働省のセンチャナック副局長と、この施設のことなどについて話ができた。

引き渡し式での演説内容も含め、やりとりをまとめると以下のとおり。

副局長

日本から衣類を毎年送ってくれていることに本当に感謝している。日本に帰ってみなさんにありがとうと伝えてほしい。衣類は地方の貧しい人たちに届けます。私もタイの人たちのためにもっと頑張ります。ですので、ＣＳＡの方たちの応援、交流をこれからもお願いしたい。みなさんの健康をお祈りします。今日は村人たち出席できず申し訳ない。（式には村長は何人も来ていた）

森Ｑ　年間に何人くらい、保護の対象となる人がここに来ますか？

副局長Ａ　年間200人くらい。40才から50才が多い。村人が連れてくるケースなどが多い。滞在期間は約２週間ほど。

鈴木Ｑ　どうやって広報してるのか？

副局長Ａ　労働省からお知らせがある。道に電話番号が書いた看板などがある。個人的に歩いてここまで来る人もいる。このようなところは全国にある。

日本ではどうですか？ブルーシートで生活している人がいると聞いたことがありますが？

鈴木Ａ　国、県、市町村の支援もありますしＮＰＯ等の支援団体もあります。ブルーシートで生活するような人は昔ほどはいないと思う。

タイ衣類引渡し式で

2019年1月24日（木）

９：00～　ルアンプラバン県教育省

報告：工藤　健弘

ルパンプラバン県教育省を訪問し、フォンペット副局長からルアンプラバン県の教育について説明を受け、意見交換を行った。

副局長からはＣＳＡの取り組みについて、外務交流関係の仕事をしていたころに耳にして

県教育省前で

おり、サンティパープ高校に対するＣＳＡの長年にわたる継続的な取り組みには非常に感謝していること、そして、ＣＳＡの寮が建設されて以降、高校から離れたところの学生もサンティパープ高校に入学し、優秀な成績を収める学生も多く輩出できるようになり、ぜひ他の県にも視察して参考にしてもらいたいとのコメントがあった。また、意見交換の中で、副局長から大学進学や留学もする優秀な寮生の輩出をルアンプラバンの発展につなげたいとの強い思いが示された。

今回のルアンプラバンの教育省訪問を通じて、ラオスの高等教育に対するＣＳＡの支援がいかに優秀な学生の育成に大きな役割を果たしているのかを改めて認識した。また、ラオスに教育に対して、日本としても海外協力青年隊をはじめとした多くの支援が長年にわたって行われているとのことを聞いていたが、ＣＳＡにも今後も継続した支援を行って欲しいと思った。

９：４０～　サンティパープ高校生寮

報告：伊津田　秀美

高校生寮に到着すると、たくさんの生徒と先生が私たちを出迎えてくれた。高校生寮の先生の司会で、鈴木事務局長が挨拶をし、メンバーを代表して森団長が挨拶をした。その後、寮監から報告を受け、校長先生からの挨拶があった。

高校生寮へ衣類引き渡し

■寮監より報告

現在、寮生は90名。１年生男子21名女子９名、２年生男子17名女子13名、３年生男子24名女子６名おり、みんな頑張って勉強している。今は大会の準備期間で、卒寮生の70％は国内と海外へ留学、県の大会の優勝者もいる（数学２位・３位、化学２位・３位、物理２位・３位、国語２位)。優勝したグループは国の大会へ行く。寮生たちは毎朝ラジオ体操をし、台所や部屋の掃除をしている。野菜の栽培もしている。

寮生はＣＳＡの皆さんに心から感謝し、御礼申し上げる。日本にいる支援者の方々にお伝えください。

寮の前で

■校長より挨拶

寮生は色んな県や地域から来ているが、楽しく勉強が出来るように、また、寂しくないようにお互いに助け合って生活している。食費

の増額は大変感謝している。トイレや扇風機、電灯などの設備も古くなっているのでぜひ検討して頂きたい。

その後、50箱の衣類の引き渡し式と、歓迎の儀式であるバーシーセレモニーが行われた。寮生から踊りのプレゼントがあり、途中から私たちも一緒に踊った。ＣＳＡメンバーからの出し物としてメンバーの年齢当てクイズをした。思いのほか盛り上がり、楽しく交流する事が出来た。

最後に各部屋の使用状況を確認し、寮生と集合写真を撮影し、お別れをした。男子寮のみ見せて頂いたが、女生徒も部屋で待っていたというのを後で聞き、女性の部屋だからと遠慮せずに見せて頂けばよかったと思った。男子寮のみの確認となり、トイレや食堂などがどんな状況か確認する事が出来なかった。

PG946便
17：20 ルアンプラバン発 →
18：50　バンコク着

ヌーソンさんとルアンプラバン空港でお別れ

2019年1月25日（金）

9：30～　在タイ日本大使館

報告：森　啓記

堀田副団長から挨拶として、訪問受け入れに対するお礼と、タイ・ウドンタニ貧困者保護センターにて衣類引き渡し式を行ってきたことの報告や、タイとラオスの違いを実感していることなどを述べた後、岡本直也二等書記官よりタイの労働事情を中心に状況説明を受け、意見交換を行った。

前年に引き続きご対応頂いた岡本二等書記官は、基幹労連・三菱重工グループ労働組合連合会のご出身で、外務省と民間の人事交流の一環で労働組合から在外公館に派遣されている大使館員「連合アタッシェ」として、2017年９月から赴任されご活躍されている。現在の担当は、現地の政府ではなくＮＧＯや地方公共団体等が、開発上の様々なニーズに見合った支援活動を行うことをサポートする日本独自の支援制度「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の運営であり、タイでは年間で８件・供与額6,000万円くらいサポートしているとのこと。

＜タイの労働事情・労働政策などの説明概要＞

・総人口6,721万人・労働人口3,855万人は、ともに日本の約半分超。産業別労働者では、農林水産業が32％（日本は3％）、商業金融17.7％、製造業17％と続くが、ＧＤＰにおいて農林水産業は10％にとどまり、製造業が33％を生み出している。
・タイで働く者の約６割は社会保障が適用されない「インフォーマルワーカー」であり、農業従事者や屋台、タクシー運転手等で働いている。
・女性の就業率（特に20代後半から40代）は高く、管理職に占める女性の割合も33.9％（2015年）と高く、女性の社会進出は進んでいる。
・失業率は全体的に低い水準で推移しているが、その理由としては人口動態（少子高齢化）の影響、賃金が低く働く先が多く存在していることや「インフォーマルワーカー」として働けば職には困らないといったことがある。
・特殊出生率は1.48（2016年）で少子高齢化が、日本より早いペースで進むのではないかと危惧されている。
・高齢化に対応するため2017年に労働者保護法を改正し、就業規則に定めがない場合の定年は60歳とした。社会保障基金より年金が55歳から支給されるため、日系企業の製造業・非製造業ともに就業規則で定年を55歳としている企業が最も多い。
・タイの労働組合は大規模な労働組合（ナショナルセンター）が15も並立し、統一的な労働組合の形となっておらず、組織率も２％程度。等々

最後に、タイの国民性は比較的おとなしい性格であり、強烈なタテ社会であるため上位の人に迷惑をかけることを好まない風潮があり、いわゆる報連相が得意でないこと、そのため具体的指示を出すことが重要であり、政府内でも所管が違えば情報共有が良くないことなどを具体的に説明頂き、今後のＣＳＡの活動に大いに参考となる機会となった。

在タイ日本大使館で

11：00～　タイ社会開発福祉省衣類倉庫

報告：山本　雅士

タイ社会福祉局フラダーターソンプック氏、倉庫担当 エー氏・セン氏に主に対応して頂き意見交換した。

倉庫は３名の担当者で仕分けし、各地へ送付するとのこと。

2018年度は4312ケース無事到着。
子ども服：972ケース
冬服：1520ケース
男性用：870ケース
（トップス80％　ボトムス20％）
女性用：950ケース

タイ衣類倉庫で

【質疑応答】
Ｑ：パンフレット作成やアピールするために各村での引き渡しの状況が知りたい。
Ａ：写真をＣＳＡ事務局へ送る。
Ｑ：どの地域にどれだけの配分で配っているのか？
Ａ：情報をまとめ写真と一緒に送る。
Ｑ：配分の基準は？
Ａ：各県側からの要求を確認して配布している。
Ｑ：足りてないものは？
Ａ：男性用のズボン
Ｑ：ニーズに合わないものはないか？
Ａ：ない
Ｑ：冬服などの仕分け基準は？
Ａ：ジャケットとそれ以外で仕分けしている。
Ｑ：衣類は同じ人へ何枚配布されるのか？
Ａ：１～２枚程度。

タイ衣類倉庫職員と

バンコクのイメージから想像がしにくい部分があったが、男性用ズボンの重要性について確認できた。男性用ズボンは絶対数が少ないため貴重な存在になっていたので、広報して、少しでも多く集めたいと思った。

お別れ夕食会

18：00～　お別れ夕食会

バンコク市内のショッピングモールのタイレストランでお別れ夕食会を行った。
まず、団長が全員無事に全ての日程が終わったことに対する労いの挨拶をした。メンバーからは「現地での視察や経験を組織に持ち帰って報告したい」、「いい仲間にめぐりあえた」等の声が出された。皆、強行スケジュールで疲れも見えたものの、この１週間の労を労い合った。

22：５０　NK850便　バンコク発　→

2019年1月26日(土)
06：30　羽田空港着

無事羽田に到着。入国審査、荷物を受け取り、ゲート外で森団長の解団宣言の後、別れを惜しみながら再会を誓いつつ、それぞれ帰路に着いた。

無事帰国しました